

2023年、日本では新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけが、インフルエンザと同様の5類となり、世界的に「コロナ明け」モードに移行した。毎年、フロリダで開催されるマイクロソフト社の開発者向けの大規模イベント「Ignite」も4年ぶりにリアルで開催されたという。このイベントにかつて私も参加したことがあり、マイクロソフト社CEO兼会長、サティア・ナデラの基調講演を聞いたことがある。そのとき強烈に印象に残ったのが、彼が講演の冒頭に引用した詩だった。その詩のタイトルは“Imaginary Number (虚数)”。詩集「3

る大規模な開発者向けのイベントである。ITの専門家的なプレゼンテーションになりがちなところを、聞き手にイマジネーションを与えながら簡潔に伝えるうえで、この詩は非常に有効だった。

テクノロジーの活用やイノベーションの種は、直線的に積み上げた発想の延長にはなく、虚数のような発想が大切だと伝えたかったのだろう。

虚数をタイトルにした私のお気に入りの一冊がある。「虚数の情緒・中学生からの全方位独学法」。IT業界にいと失いがちな情緒を、虚数から見出す一冊だ。

数 | 理 | の | 窓

AI時代に 向き合うための数字



Sections」から冒頭三行を引用する。

“The soul,
like the square root of minus 1,
is an impossibility that has its uses.”

虚数 i とは2乗して -1 になる数である。日本語に拙訳すると「魂とは負の平方根のようだ、それそのものでは使うことはできない」。この詩の作者は、サティア・ナデラと同郷のインド出身の詩人ビジェイ・セシャドリ (Vijay Seshadri)。2014年にピューリッツァー賞を受賞している。

サティア・ナデラの趣味はクリケットと作詩とのことだが、彼はAIや未知のテクノロジーの活用を「魂」と「虚数」に美しく見立てていた。場所は数万人が来場す

1000ページを超える紙の厚みと重さは手にするたびに新鮮な驚きを与えてくれる。そこからひとつネタを紹介したい。素数は、1より大きい自然数のうち、1とその数でしか割り切れない。ところが、なんと虚数を使うと因数分解できてしまう。例えば素数の「5」は、虚数を使うと「 $5 = (2+i)(2-i)$ 」と因数分解できてしまう。

著者の吉田武は数学だけでなく、日本画家の速水御舟に関する著作もある。テクノロジーと詩、数学とアート、開発者と情緒。変化が激しく、不確かで割り切れない時代。この時代に向き合うために必要な考え方は、分野の境界を行き来し、虚数的な発想で割り切ることが大切なのかもしれない。

(花崎 徹治)